

「教員の資質能力の向上」と「信頼される学校づくり」

山梨県教育委員会 教育長 斉木 邦彦



教育改革、教育再生と言われますが、人が生きていくことと分かちがたく行われている教育という営みに対して改革と言うのは少々違和感があります。しかし、「教員の資質能力の向上」や「信頼される学校づくり」などの大切さは言うまでもなく、このことに最大限努力するのは私たち教員に当然求められる姿勢です。

「教員の資質能力の向上」というと、先生方の個人的な資質や能力という面に関心が向いてしまいがちです。一人一人の先生が自らの力を高めようと努力することは大切なのですが、教員の力は個人的に発揮されるものではありません。教員集団の中で、そしてかけがえのない人格を持った一人一人の子供との関係の中で発揮されるのです。校長先生方のお力も、部下の教員のそれぞれの力をうまく引き出してこそ発揮できるのだと思います。

学校や地域の歴史の一コマを担い、次の世代に確実に受け継いでいくのだという意識も大切です。自分が担うのは全体の中の一部分にすぎない、しかし欠くことのできない大切な一部分です。だからこそ自分の役割を責任をもって果たす。その意識の中で職務に励んでこそ先生方の仕事は光ります。これまでの校長先生方に受け継がれてきた学校の歴史を大切に守り育て、次の校長に確実に受け渡し、歴史を受け継ぐということ意識した仕事は必ず校長先生方ならではの独自性を発揮すると思います。

「信頼される学校づくり」とは、その実現した姿を未来に求める、ということではないと思います。大人が子供を信じ、子供が大人を信じる、日々の営みそのものの姿であると思います。子供と大人が相対する場面ごと当たり前なことを大切にする積み重ねの姿を信頼される学校と表現しているのだと思います。今日は明日のためにある以上に今日のためにあります。今のこの一瞬一瞬を大切にする、その思いで目の前の子供たちと向き合い、そして自身も今を大切に真剣に生きようとする、その姿勢や思いは子供たちに伝わります。子供たちと共に過ごす日々の生活の中で自然に伝わる教育というものを大事にしたい。まずはご自分を、ご自身の生きる力を信じてください。自分の中に自分を支える力の存在を信じられた時、同じ力に支えられている者同士として子供を信じることができるのだと思います。

何があっても最後の責任者は校長である、という使命感と緊張感、そのために楽しさとつらさの間の振幅幅は大きいと思います。しかし校長先生としてのご自身を宿命ととらえたとき迷いは吹っ切れ、限らない自由を手にすると思います。校長としての自分を受け入れ、全ては自分の責任、という覚悟が生まれてきます。理想の校長像があるわけではありません。先生方の個性を通じて立ち上がってくる校長像、学校の歴史の中で先生方、そして子供たちとともに作り上げる校長像が全てです。教育委員会は先生方が日々の業務を推進される上でそっと後押しができるような存在でありたいと思います。